父の川柳遺稿集に思う。（Part２：新春）

北広島医師会
坂泌尿器科北広島クリニック　池田龍介（いけだりょうすけ）

この度、年男としての「新年随想」の原稿執筆のご依頼を頂き、どうしたものかと思案にくれておりました。ある日、何気なく見ていたテレビで、○○Part２という番組をやっておりました。前回、同誌から執筆のご依頼を頂き、父の川柳を基にした「父の川柳遺稿集に思う」（令和２年12月１日、北海道医報第1227号）を掲載頂きました。その際に、ある先生から「良かったよ」のお言葉を頂いた記憶があり、「そうだ、これ、これ」柳の下の泥鰌は覚悟で、父の川柳遺稿集Part２でお願いすることにしました。さぞかし、天からは「バカ息子　あの世の俺にたよる春」とでも嘆いているでしょうが。

前回にも紹介しましたが、父は、岡山県県北にて田舎の一開業医として日々忙しく休むことなく働き続け、

子の素足すでに春なり谷の川
苗代が私語となりしか箱の苗
野仏やそこに群がる曼殊沙華
米不足わびるか雪に立つ案山子

往診の傍らで折々の季節を詠みつつ年の暮れを迎えると、

強引に善意を求む年の暮れ

と世の理不尽さを嘆きながらも、毎年、父には、新年を迎えるためのルーティンがあり、大晦日の夕方早々に風呂に入り紅白歌合戦の始まる頃には、いつも決まった運転手さんのタクシーで、最上稲荷に初詣に向かうのです（余談ですが、北海道では馴染みのないお稲荷さんかと思いますが、正式名称を最上稲荷山妙教寺と称し伏見・豊川と並ぶ日本三大稲荷とされ、神仏習合形態が許されたお寺でもあり、神社でもあることから鳥居が配されています）。当地に到着後、除夜の鐘を聴きつつ、茶店でその年最後の酒を楽しみ、新年と同時に参拝し　新年最初の酒がお神酒となります。その年の大晦日と年が明けての元旦はいつもなら休肝日の曜日であったようですが

神妙に御神酒いただく休肝日

初詣で終えて帰宅しますと、通常では、

何時にても出来る昼食老夫婦
愚痴もまた生活リズム老夫婦

の日常だったのでしょうが、

孫たちのうち揃いたり松三日

と帰省した孫との正月を大変喜んでくれておりました。小生にも二人の孫がおり、時折LINEでのビデオ通話でその姿を見て他愛もない話をしております。連絡が長く無いと、何か病気か、大丈夫かと気を揉んでおりますが、父も同じだったのでしょう。小生の仕事の事や日々の診療で気になった事など大した内容も無い電話を掛けてきていましたが、その真意は、

孫たちの電話の声は聞きわける

が本心であり、その孫たちに

明日よりも明後日を期す孫であれ

とその成長を楽しみにする心優しい父でした。今は、孫たちも、親になり、父にとっては曽孫もでき、それぞれに父の期待したような孫と成長しているのかは父の判断に任せますが。享年68歳と自分にとっても、「おかしいなぁ」と思いながらの急な旅立ちをした池田天馬（昭雄）の川柳の一部を、再度のご披露させて頂ける機会を頂き、北海道医報には感謝申し上げます。

資料：池田天馬川柳遺稿集